No. 35 (May 2023)

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギャスケル協会ニューズレター

人の情けは花のかおり―ギャスケルとともに歩む

関田　朋子

日本ギャスケル協会が設立されたのが 1988 年、それから十余年が経った 21 世紀の幕開けに、私は入会させていただきました。当時の職位は助手で、くちばしの黄色いひよっこ研究者でした。それからほぼ 4 半世紀弱が経ちました。

2000 年当時は山脇百合子先生が会長でいらっしゃいました。今思えば、右も左も分からないからこそ、私は図々しくも山脇先生と親しくさせていただけたのでしょう。少し事情があって大会の後に先生をご自宅までお送りしたことがございました。その際に「良かったらまたいらっしゃい」とおっしゃられたのも、先生のお優しい気持ちからであったと、今ならば分かります。けれども、当時の私はそれを真に受けました。たまたま私の勤め先が先生のご自宅に近く、歩いて行ける距離でした。訪ねて行って二人でおしゃべりをしていると、山脇先生が可愛がっている大型犬のアル君が、時々やって来ては、もの言いたげな顔でこちらを見ていました。よそ者の私が山脇先生に悪さをしていないか、確認しにきていたのでしょう。

ここで、山脇先生とギャスケル研究の話をしたとでも言えれば格好もつきますが、ギャスケル研究者の第一人者である山脇先生と、その末席を汚すどころか今にもそこから転がり落ちそうな私です。必然的に、話の内容はたわいないものになりました。先生のお宅の庭には小ぶりのバラが咲いていました。目を細めて眺めていらっしゃるので、私が「きれいですね」と凡庸なことを言うと、「家の改築の所為で今は狭い場所に咲くしかないバラの花たちは、『この家の人間は、私たちのことを、一体どう思っているのかしら』とさぞオカンムリでしょうね」と笑っていらっしゃいました。それを受けて私が、蛇がかま首をもたげたような不気味な形の花を里山に咲かせるウラシマソウの話をすると、見てみたいとおっしゃるので、帰省した際に掘り出してお持ちすると庭先に植えて下さいました。一緒に散歩をすれば、あれはナンジャモンジャの木だと、その名の由来とともに教えて下さいました。

その後、日本の大学はどこも年々忙しくなり、齢を重ねれば校務の量も増え、要領が悪い私は青息吐息の毎日を過ごすようになりました。それにもかかわらず私は海外の博士課程に登録し、教員と大学院生という二足の草鞋を履いてさらに忙しくなりました。山脇先生を始めとする先輩研究者の先生方にあれほど良くしていただいたのに、放蕩息子さながらに、日本ギャスケル協会から足が遠のきました。

それでも不思議なことにギャスケルとの縁は切れずにおりました。英国の博士課程の指導教授がジョウアン・シャトック先生でした。ピカリング＆シャトー社のギャスケル全集のジェネラル・エディターをなさった先生です。先生のご指導の下で英国ギャスケル協会に投稿した論文が通り、それをきっかけにその編集委員会からお声がかかりました。また、イライザ・ミーティヤードという女性ジャーナリストについて博士論文を書いている途中、ギャスケルとミーティヤードには共通の知人が多く、二人が実際に会っていることを知りました。

数年前に Ph.D.をやっと取得し、半世紀も生きたこの頃になると、自分の若い頃の馬鹿さ加減も良く分かってきますので、思い出すのも申し訳ないやら恥ずかしいやら、しばらく遠ざかっていた罪悪感も相俟って、私はさらに日本ギャスケル協会の大会・例会に出席しづらくなりました。そうした折に、会長の大野先生から副会長にというご連絡を頂きました。滅相もない、もっとギャスケル協会にご尽力なさった方にと言って、そういう先生方のお名前を記憶する限り次々に挙げて、最初はお断りいたしました。大野先生からどの先生方にもそれぞれに副会長を引き受けられないご事情があることを（個人情報

に障りのない範囲で）お伺いするうちに、かつて良くしていただいた先生方にギャスケル協会のために働くことでご恩を返したい気持ちもあるという言葉が漏れました。大野先生からそれでは恩返しをして下さいと言われて、初めて気持ちが動きました。実際には恩返しと申しましても持てる力は微力に過ぎず、申し訳ない限りではございますが、放蕩者の帰還です。

昨年度（2022 年度）、私が受け持つ大学院の授業で『北と南』を扱いました。ご存知のようにマーガレットとベッシーは花をきっかけに知り合います。その場面に、20 年以上前に山脇先生とあれこれの花の話をしたことを思い出しました。そしてどこかで『北と南』のこの場面について言及した、「人の情けは花のかおり」といったようなタイトルのエッセーを読んだように思いました。記憶違いかもしれません。ご存知の方がいらっしゃいましたら、どうぞ、ご教示くださいませ。末筆ではございますが、この場をお借りして、もの知らずの人見知り、見当違いも恥ずかしいばかりの新米研究者だった私を見守り育て、そして放蕩者の帰還をお許し下さった、大野先生を始めとするギャスケル協会の皆様に、衷心より御礼申し上げます。

◆◆◆新刊紹介（2022 年度）◆◆◆　（掲載情報は 2023 年 3 月 15 日までに報告されたものです。）
江澤美月（共著）「ウィリアム・モリスとエピングの森–『タイムズ』紙の議論を参照して」（『自然・風土・環境の英米文学』金星堂、3,300 円、2022 年 12 月 25 日）

第 34 回大会レポート

日　時：2022 年 10 月 1 日（土）
　　対面および Zoom によるオンライン開催

13:00 開会の辞　日本ギャスケル協会会長 大野 龍浩（立正大学教授）
　　総合司会 矢嶋 瑠莉（千葉工業大学非常勤講師）

13:05～13:35 研究発表 1　司会 松浦 愛子（釧路公立大学准教授）
“China’s Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels
中越 亜理紗（東京大学大学院博士課程）

13:35～14:05 研究発表 2　司会　矢野 奈々（北里大学専任講師）
「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」
星 志乃（早稲田大学大学院博士課程）

14:10-14:40 研究発表 3　司会　矢次 綾（松山大学教授）
「リジー・リー」における〈堕ちた女〉の表象と産褥期精神病」
早川友里子（大妻女子大学専任講師）

14:50-15:20 総会

15:25-16:25 講演 1　司会　木村 晶子（早稲田大学教授）
「エリザベス・ギャスケルと煽情小説」
松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

16:35-17:35 講演 2　司会　金山 亮太（立命館大学教授）
「イギリスと日本の社会小説雑感」
石塚 裕子（神戸大学名誉教授）

17:35-17:40 閉会の辞　日本ギャスケル協会副会長 閑田 朋子（日本大学教授）

研究発表 1

“China's Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels

This presentation demonstrated how Elizabeth Gaskell had cultivated an acute responsiveness to the world beyond England, by investigating her portrayals of oriental commodities like tea, opium, silks, and shawls in her novels, namely *Mary Barton*, *Ruth* and *North and South*. In the Victorian era, while women were rarely direct participants of imperial actions, the consumption of foreign commodities increased indirect interactions between women and overseas territories. Consequently, they have managed to crawl into the corners of Victorian novels. In Gaskell's case, the oriental commodities with hybrid cultural characteristics were utilised to either domesticate or orientalise the item or the user in question to serve the purpose of her narrative. I argued that whether they are problematised or not seems to depend on the social status of the characters in relation to them, especially with greater concern towards the lower-class. As for the orientalised middle-class heroines like Margaret Hale and Jemima Bradshaw, I maintained that such portrayals seek to promote the elevation of woman in the patriarchal Victorian society and even serve to empower them by associating them with oriental versions of the upper-class. My argument was that Gaskell's showcasing of the oriental imageries are ultimately dedicated to her endeavour to advocate her views on domestic issues of class and gender. Meanwhile, although Gaskell's novels can be situated within the presence of empire in domestic culture via importation of commodities, it can be said that Gaskell distances herself from diving too deep into controversial issues concerning colonialism. (Arisa Nakagoe)

研究発表 2

「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた **disability**」

本発表では *Ruth* のサースタン・ベンスンを中心に、ジョージ・エリオットの *Adam Bede*、*The Mill on the Floss* を取り上げ、ギャスケルとエリオットの障害者表象の特徴や、障害者に限らず社会的立場が異なる者への理解に対する考えの相違について考察した（本要旨では障害学の表記に倣い、「障がい」でなく「障害」とする）。サースタンは、彼自身の過去が詳細に語られている点や共同体の一員として位置づけられている点において、他の作家が描く障害者と大きく異なっている。また、障害を持つ登場人物が自己の能力を発揮しきれない状況に陥りやすいのに対し、優れた観察力や共感力を活かして自身の考えを非障害者に伝えることができるサースタンは、障害者の限界を克服している。エリオットは、障害者が不当な扱いを受ける現実を描くことで、彼らが現在置かれている状況への理解を示している。一方ギャスケルは、障害者の限界の克服や非障害者からの理解・共感を得られる様子など理想の社会像を読者に示している。両者の小説における障害者表象は、ギャスケルとエリオットの他者への理解・共感の示し方の違いを鮮明に表しているのではないかと考えた。（星志乃）

研究発表 3

「リジー・リー」における〈堕ちた女〉の表象と産褥期精神病」

本発表では、「リジー・リー」（1850）を取り上げ、主人公リジーの精神を病んだ母親としての表象に着目した。19 世紀において女性特有の精神疾患であると考えられていた産褥期精神病と〈堕ちた女〉との関連について概観した上で、ギャスケルは、性的及び道徳的にも〈堕ちた女〉とされたリジーが、子を失い、精神を病みながらも献身的な母親であろうとする姿を描くことで、その尊厳の回復を模索した可能性について考察した。しかし、献身的な母親というアイデンティティを通じて〈堕ちた女〉からの脱却を試みることは、同時に家父長制社会がジェンダー規範に基づき女性に求めた母親しての役割を是認し、強化することにもつながる。女性は子どもを生み、育てることが責務であるというジェンダー規範は、同時にその価値基準から逸脱する女性を排斥することになる。したがって、本作品は精神を病んだ、献身的な母親としてリジーを描くことで〈堕ちた女〉という呪縛からの解放を模索しつつも、最終的にはそれは達成されていないと考えられる。（早川友里子）

講演 1

「エリザベス・ギャスケルと煽情小説」

エリザベス・ギャスケルが最後に書いた小説である『妻たちと娘たち』が、『コーンヒル誌』に掲載されたとき、同時に掲載されていたのが、ウィルキー・コリンズの『アーマデイル』であった。『コーンヒル誌』のようなファミリー・マガジンの売れ行きは、掲載される小説に左右されるといわれた。それほど、掲載小説の選択は重要であった。1860 年に創刊された『コーンヒル誌』は、文学史的には、煽情小説の時代に誕生した雑誌であった。

『コーンヒル誌』の読者たちは、この時代に最も人気のあった煽情小説と、最も定評のあったギャスケルの家庭小説を読み比べるという楽しみを享受したということである。煽情小説と家庭小説は、ジャンルとしては対立するように思われるのだが、爆発的な人気を誇った煽情小説を看過していた小説家はいないだろう。「貸本屋の女王」と称されたメアリ・エリザベス・ブラッドンの『オードリー卿夫人の秘密』や『オーロラ・フロイド』と、ギャスケルの『妻たちと娘たち』を比較しながら、ギャスケルが、どのようにこの人気のジャンルに対応しようとしていたのかを考察した。（松本三枝子）

講演 2

「イギリスと日本の社会小説雑感」

ギャスケルの社会小説を書く動機は、労働者階級の惨状を中産階級に伝えるという義務感からで、労働者を社会の犠牲者、善良で道徳的といった観点、雇い主と労働者が最終的には和解するキリスト教の慈善に満ち、ロマンスが挿入する。ディケンズは労働者に同情しつつも自身は中産階級の安定には揺るぎない。*Hard Times* では功利主義攻撃を意図し、悪党の労働者も登場する。両者とも労働組合には懐疑的である。英国初等教育は 1870 年の制定で(日本の学制は 1872 年)、当時英国人労働者自らが告発することはできなかった。

日本の場合は作家自身がプロレタリアートの立場となる。英国では雇い主と労働者の二者に対し、日本では『蟹工船』、『ああ、野麦峠』など、資本家と労働者と国家の三者の関係が絡み合う。後進国として西欧に追いつこうとする当時の国家政策があったからだ。現代日本では非正規労働が多数となり、雇い主側には都合がいいが、『OUT』の女性たち、或は『ブラックボックス』のフリーターに見られるように労働者側には問題が多い。（石塚裕子）

大会レポート

第 34 回大会は、日本赤十字看護大学広尾キャンパスを会場に、対面とオンラインを併用して開催された。コロナ禍にあって、対面での集まりが実現したのは 3 年ぶりのことである。会場に 22 名、オンラインによる参加者 15 名、計 37 名の盛会となった。夏の名残を感じさせる日差しの中で金木犀の香りが秋を告げる晴天の日に、「しっかり学びましょう」と大野龍浩会長より開会の辞が述べられた。

今大会は矢嶋瑠莉氏の総合司会により進められ、まず 3 名の研究発表が行われた。司会の松浦愛子氏のもと第 1 発表者である中越亜理紗氏は"'China's Earth and Indian Leaf': Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell's Condition-of-England Novels"として Gaskell の作品において茶、アヘン、絹、ショールといった東洋産の品々に注目し、それらを手にした女性達が「奴隷」あるいは「女帝」と表象された場合のヴィクトリア朝における結婚、階級、ジェンダーに関する問題へと論を展開した。

第 2 発表では、司会が矢野奈々氏によって行われ、発表は星志乃氏による「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」であった。星氏は、*Ruth* における Mr Benson の役割について、ともすれば社会のアウトサイダーとされてしまう障がい者が、その観察力、共感力によってコミュニティのオブザーバーとなっていることを指摘した。

さらに第 3 発表へと進み、司会の矢次綾氏のもと早川友里子氏の発表「「リジー・リー」における＜堕ちた女＞の表象と産褥期精神病」が行われた。早川氏はリジーの状態を、女性であれば誰にでもおこりうる女性特有の心身の変化に伴う精神疾患ととらえた上で、リジーと母リー夫人とに共通する行為から、ギャスケルがリジーに献身的な母の役割を与えていると考察した。

総会を挟み、2 名の先生方にご講演いただいた。まず司会の木村晶子氏から松本三枝子先生のご紹介があった。ご講演「エリザベス・ギャスケルと煽情小説」では、Wilkie Collins 作の煽情小説 *Armadale* と家庭小説であるギャスケルの *Wives and Daughters* がほぼ同時期に *The Cornhill Magazine* 誌上に掲載されていること、両作品は異なったジャンルに属するものの読者層が重複していたと考えられることを指摘された。そして *Wives and Daughters* に描かれる Cynthia Kirkpatrick の不適切な行動が周囲にもたらす緊張は、煽情小説の流行を視野に入れたギャスケルの新しい試みである、と述べられた。

続いて司会の金山亮太氏のもと石塚裕子先生が登壇された。ご講演は「イギリスと日本の社会小説雑感」であった。イギリスでは、19 世紀の未熟な資本主義を要因とする、労使間の問題を扱った小説を社会小説と定義するのに対し、日本では、プロレタリア小説と称されることを指摘された。日本の作家が、自らもプロレタリアートとなっているのに対し、ギャスケル、Dickens は、あくまでも中産階級に留まって、それぞれの作品の中で、社会の犠牲となっている労働者への同情を示した、と論考された。

大会は閑田朋子副会長の閉会の辞により、開催にあたりご尽力くださった先生方への感謝の拍手と、参加者全員が久しぶりに集えた喜びをお互いへの拍手をもって表し、締めくくられた。（柏木いずみ）

2022 年度日本ギャスケル協会役員会報告

役員会(2022 年 9 月 27 日（火）20 時～21 時 45 分 オンライン Zoom)
①会員動向　現在会員数は 75 名。
②2021 年度会計報告、2022 年度予算案が承認された。
③日本ギャスケル協会奨励賞
　若手の育成や奨励とともに、日本ギャスケル協会の会員増加へとつなげるために設けることとし、総会に提案する。ただし奨励賞投稿規定の細かな文言の訂正等は、三役に委ねる。
④19 世紀イギリス文学合同研究会
　研究発表、シンポジウム発表者を公募する。応募者はなければ、三役が人選し依頼する。
　25 年度のホスト校をギャスケル協会（大前先生）が担当してもよいと返答する。
⑤『ギャスケル論集』投稿規定の改訂
　改訂が承認された。ただし投稿規定の施行日は 23 年 4 月 1 日だが、10 月に出る『ギャスケル論集』最新号に掲載されている投稿規定は旧版なので、出来るだけ早い段階で HP に掲載するとともに、メーリングリストで流す。

2022 年度総会報告

総会(2022 年 10 月 1 日（土）14 時 50 分～15 時 20 分　日本赤十字看護大学兼オンライン Zoom)
① 2021 年度会計報告、2022 年度予算案が承認された
② 日本ギャスケル協会奨励賞の設置が承認された。
③ 『ギャスケル論集』投稿規定の改定が承認された。
④ 19 世紀イギリス合同研究会のホスト校を 2025 年に当協会が担当してもよいと回答することが承認された。

（芦澤久江）

事務局報告（2021 年度）

2021 年度日本ギャスケル協会会計報告　(2021.4.1-2022.3.31)

2021 年度一般会計予算			
収入		支出	
前年度繰越金	909,624	通信費	50,000
年会費（含　英国）	468,000	大会費	150,000
		事務費	11,000
		印刷費	180,000
		英国協会費	74,000
		研究会費	3,000
		（小計）	468,000
		次年度繰越金	909,624
合計	1,377,624	合計	1,377,624

2021 年度一般会計決算			
収入		支出	
年会費	371,000	通信費	35,501
内訳	355,000 (2021 年度一般)	大会費	50,000

	6,000 (2021 年度学生)	事務費	11,844
	10,000 (過年度)	印刷費	121,400
多比羅先生香典返し	5,000		
（小計）	376,000	（小計）	218,785
英国協会	90,000	英国協会費	90,000
内訳	88,000（2021 年度一般）		
	2,000（2021 年度学生）		
（小計）	90,000	（小計）	90,000
前年度繰越金	909,624	次年度繰越金	1,066,839
合計	1,375,624	合計	1,375,624

上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2021 年度事務局長　2022 年　芦澤久江　㊞
上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2021 年度会計監査　2022 年　猪熊恵子　㊞
上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2021 年度会計監査　2022 年　早川友里子　㊞

2022 年度一般会計予算案				
収入			支出	
前年度繰越金	1,066,839		通信費	50,000
年会費（含 英国協会）	446,000		大会費	150,000
			印刷費	180,000
			事務費	11,000
			英国協会費	90,000
			研究会費	3,000
			(小計)	484,000
			次年度繰越金	1,028,839
合計	1,512,839		合計	1,512,839

日本ギャスケル協会第 35回大会予告

2023 年 10 月 8 日（日）　於・同志社大学今出川キャンパス　良心館４０１教室

総合司会：齊木愛子（熊本大学非常勤講師）

●開会の辞　13:00~13:05　日本ギャスケル協会会長 大野 龍浩（立正大学教授）

●研究発表 1 13:05~13:35　司会：木村正子（岐阜県立看護大学准教授）
角田裕子（松山大学非常勤講師）

「『北と南』における価値観の変遷」
●研究発表 2 13:35~14:05　司会：遠藤花子（日本赤十字看護大学准教授）
猪熊恵子（東京医科歯科大学准教授）
「ストーリーとヒストリーのあいだ――『シルヴィアの恋人たち』を読む」
●シンポジウム　14:15～15:55
司会・パネリスト：金子幸男（西南学院大学教授）
パネリスト：伊藤正範（関西学院大学教授）
パネリスト：西垣佐理（近畿大学教授）
「ナショナルな物語としてのギャスケル――統合と分断」
●総会 16:05～16:35
●講演 16:40~17:40 司会：杉村　藍（鳥取大学教授）
廣野由美子（京都大学大学院教授）
「『北と南』における＜高慢＞と＜偏見＞――オースティンとギャスケル」
●閉会の辞 17:40~17:45　日本ギャスケル協会副会長　閑田朋子（日本大学教授）
●懇親会　18:30 より　京都ガーデンパレス

★ 次年度研究発表を募集しております。お申し込みは 12 月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケル作品の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

2023 年
5 月 14 日　*North and South*, Chs. 1-4　矢嶋瑠莉／宇田朋子
7 月 9 日　*North and South*, Chs. 5-8　宇田朋子／閑田朋子
9 月 10 日　*North and South*, Chs.9-12　大前義幸
11 月 12 日 *North and South*, Chs. 13-16　村上幸大郎／大田美和
2024 年
1 月 14 日 *North and South*, Chs.　17-20　大田美和／長浜麻里子
3 月 10 日 *North and South*, Chs.　21-24　長浜麻里子／松浦愛子
5 月 12 日 *North and South*, Chs.　25-28 中越亜理紗／河井純子

日　時：奇数月　第 2 日曜日　午後 2 時～午後 4 時

※ 原則として Zoom による開催。日程等に変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお持ち申し上げます。

編集後記

NL の編集を初めて務めさせて頂くにあたり、会長の大野龍浩先生、事務局長の芦澤久江先生、前号まで編集を担当して下さっていた遠藤花子先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。花が匂い立つかのような巻頭エッセイを寄せて頂いた閑田朋子先生をはじめ、お忙しい中ご執筆下さった皆さまに心より感謝申し上げます。（編集 桐山恵子）

発行：　日本ギャスケル協会
〒422-8545
静岡市駿河区池田 1769
静岡英和学院大学短期大学部
芦澤久江研究室
URL: http://www.gaskell.jp/
e-mail:ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp
発行日： 2023 年 5 月